

聖トマスに於ける実存文と叙述文の 論理的位階に関する一考察

藁谷敏晴

学的知識 (scientia) の総体と問い (quaestio) の総体に関しては、既にアリストテレスが確認し、トマスがそれを受けて；

1. 従って彼 (アリストテレス) は問いの数と知られるもの数は等しい、と言うのである。と言うのも学的知識としては論証 (demonstratio) によって獲得された認識だからであり、論証によって獲得される可きは以前には知られていなかったものの認識なのであり、また問いとは知らぬものについてなされるのである。それ故に問われるものは知られるものと等しいということになる、⁽²⁾

と注解で補足しながら認める様に、

2. 問いと学的知識は数に於いて相等しい、⁽³⁾ ということが問いと学的知識との間の基本的原則としてアリストテレスおよびトマスに於いて認められていたのである。この基本的原則は、トマスがアリストテレスとともに認める当のこのテーゼに関して、アリストテレスよりも一層明確に諸質問間の論理的位階性、即ち質問の総体に内在する論理的序列関係、を論ずる時、本質的に重要となるのである。と言うのも、アリストテレスが言う様に；

3. 言明的なのはすべての文なのではなく、真または偽である文である、⁽⁴⁾
そしてこれはトマスが言う様に言明の定義と解釈される可きであるから、従ってトマスが主張する様に；

4. 学的知識はまさに真理についてであり、一方真理は言明によってのみ示されるのだから、ただ言明のみが知られ得る、従って問い得るものなのである、⁽⁶⁾

ことを認める時、論理的に興味深い問題が生ずることとなる。と言うのはトマスの主張に従えば、言明のみがその真偽性を問い得るものであり、また学的知識と言

うのは真なる言明なのであるから、真なる言明の総体に内在する論理的序列構造は実は知識そのものの総体に内在する論理的序列構造と相応することになり、また一方では問いの総体と知られ得るものの総体が相応するのだから、結果的には質問文の総体に内在する論理的構造と知識の総体に内在する論理的構造の間には一種の相応関係が存することになるからである。従って質問の総体に内在する普遍的論理的序列関係を論ずることは、人間知性がおよそ持ち得るすべての可能な知識の総体に普遍的に成立している論理的序列関係を論ずるということになるのであり、その意味で理論的に重大な意味を持つのである。

本論はトマスによる“問い”の総体に内在する論理的序列関係の分析を論ずることを通じて、“知識”の総体に内在する論理的序列関係を考察することを意図している。

まず最初に用語上の規約を行いたい。“存在”という語の現在論理学に於ける立場は、フレーゲ = ラッセル的伝統の下では“述語の性質”として把握される。この立場はクワインによって極端な所にまで押し進められた。彼の言う所の論理的に整備された言語 (logically regimented language)⁽⁷⁾ である。彼に従えば、存在の荷手は唯量化記号のみであり、他の語は存在指示には一切関与しない。名詞もまた固有、一般を問わず全く存在関与の能力は持たず、記述理論を用いて文法的に述語に⁽⁸⁾変換されることで処理される。そしてこの立場では個別者の端的な実存存在を示す意味での存在概念は端的には表現されないのである。例を挙げれば文“Socrates est”は個別者“Socrates”の端的な実存存在を表現しない。この文の論理形式は次の様にして得られる；

a. “Socrates” を述語 (又は動詞) “est-Socrates” に変換し、

さらにこれより次の表現を構成する；

b. $(\exists x) (x \text{ est-Socrates}) \wedge (x) (y) (x \text{ est-Socrates} \wedge y \text{ est-Socrates} \supset x = y)$

そしてこれが“Socrates est”の論理的に正規な形とされるのである。主語が一般名詞の場合にも同様な方で処理される。例えば、文“homo est”は；

c. $(\exists x) (x \text{ est-homo})$

をその論理的に正規な形として持つとされるのである。然しながら筆者にはこのク

ワインの立場はあまりに極端であり、かつ人間言語の自然さを基準にした時、極めて不自然に思われる。さらに存在論を表現するに際し、日常言語により近い、自然な論理言語の体系が既に構成されている点を顧みて、⁽⁹⁾筆者はクワインの見解を伝統的存在論記述には不適切なものと思われ、採用しないことにする。筆者が伝統的存在論記述に妥当と思う言語体系自体に就いて論ずるのは別の機会に譲るとして、本論では文“Socrates est”の様に個別者表示語を主語とし、単に繫辞としてのみ働くのでない語“est”，即ち存在に関する情報力を持つ“est”から成る文を実存文と呼び、一般名詞を主語として存在に関する情報力を持つ“est”から成る文を存在文と呼び、一応両者ともそれ自体で、即ち文法的変形無しに、論理的に正規であるとしておく。この実存文と存在文の区別のこの論稿上で果す役割は論を進めるにつれて明らかになるだろう。

質問にはアリストテレスが言う様に四つの種類がある。即ち、(1) an sit (があるか)、(2) quid est (何であるか)、(3) quia est (事実であるか)、(4) propter quid (何故であるか)である。⁽¹⁰⁾ところでトマスはその『形而上学註解』(L. VII, lec. 17)でこれらの諸質問間の論理的序列関係について極めて興味深い指摘を行っている。彼は“quid est”の問いの何たるかを論じて、アリストテレスを補足しつつ、⁽¹¹⁾次の様に論ずる；

5. (例えば“quid est homo?”と問う時)これらの問いには単項、⁽¹²⁾例えば“homo”のみが現われて、“homo”であることがそれらに適合するところの(肉や骨等の人間を形づくる)⁽¹³⁾諸部分としてのものども、もしくは人間の個別的基体が現われないが故に(問いの意図が)不明確となるのである。⁽¹⁴⁾

この注解箇所では注意すべきは、トマスが“quid est”の本質文が持つ意図の不明確さを論ずるにあたって、積極的に“suppositum”という本質的な意味論的な用語を用いることで、事態の意味論的側面を表明、重視している点であり、この事実は決して看過する可きでない。彼は本質質問の不明確さの原因を決して単に構文論に求めているのではなく、意味論に求めているのである。即ち“quid est homo?”と問う時生じる質問の意図の不明確さの理由を、個別者指示語がその問いの中に明示的に現わされていないことから生じる、とトマスは考えているのである。言い換え

れば個別者指示語，従って個別者，が本質質問に関して理論的に本質的に重要な役割を果たしていることがトマスに於いて了解されていたことを，彼が“基体”という本来的に意味論に属する用語を使用して議論を補強，展開している事実に見て取る可きだろう。実際この意味論的な側面の重視は，論を進めるにつれて明らかになる様に，トマスの知識の階層論にとって本質的なのである。

しかしながらこの問題はトマスも指摘する様に，直接にはアリストテレスがここで問題にしている論点には結びつかない。というのもアリストテレスが扱うのは原因の問い“propter quid”についてなのであり，本質の問い“quid”の不明確さについてではないからである。しかしながらトマスはこの難点を注解の論理構成に於いて次の様にうまく解消して行く。事実かの指摘は次に述べる“quid est”の問いの“propter quid”の問いへの還元(17)の布石として注解に於いては扱われ，この還元について彼は次の様に論じている：

6. “quid est”の問いは“propter quid”の問いに変換可能である。というのも“quid est”の問う所は本質，即ちその故にその“何であるか”が問われる当のものが(18)，その固有の主語的諸基体の任意のものについて述語され，またその固有の諸部分に適合するそういった本質についてなのである。事実ソクラテスが人間であるのは“人間とは何か”という問いに対する答がソクラテスに適合するからである……それ故“人間とは何か”を問うことと“何故にこのもの，即ちソクラテス，が人間であるか”……を問うこととは同じことなのである……それ故に彼（アリストテレス）は，問いに於いてこれこれ（の個別者）が示されていないことが問題を引き起こすのである，とここで主張するのである。(19)

この議論に於いてトマスはアリストテレスに従いつつ“quid est”の問いを“propter quid”の形に変換する一般的手続きを与えている，と解釈される可きことは明らかである。この手続きを一般的に述べれば次の様になるであろう：

- A. “quid est A?” が問われた時，
 B. “A” と呼ばれる個別者 a を取り，
 C. 問い “propter quid a est A?” を構成せよ。

この時：

D1. quid est A ? \equiv propter quid a est A ? (20)

ここで項“*a*”の項“*A*”に対する論理的關係について一言断って置きたい。項“*a*”の項“*A*”に対する關係は本質的に意味論的であり、単に個別者が“*A*”と呼ばれているということが必要かつ充分である。と言うのは、今問われているのは項“*A*”が何であるのかということなのだから、そして問いとは知らぬものについてなされるのだから、今問いが行われている時に問う者、問われる者が既に知っているのは、語“*A*”が有効に使用されているということ、そしてその語“*A*”が有効に個別者*a*に適合して使用されている、という二点で必要かつ充分だからである。従って D1. の論理的に一層正確な表現は次の様でなければならない。

D2. *quid est A? ≡ propter quid hoc cui convenit nomen “A” est A?*

これがトマスが主張する“*quid est*”の問いの“*propter quid*”の問いへの変換の一般的形式である。かくして本質探求の問題は本質的に意味論的である。

さてこの様にして“*quid est A?*”の問いの“*propter quid hoc est A?*”の問いへの還元に於いて、“*A*”と呼ばれる個別者の実存存在が中心的役割を果す訳だが、これについてトマスは註解に於いて次の様に論じている；

7. “*quid est home?*”なる問いに於いては人間であるところの個別者の存在は知られたことでなければならない。(22) (そうでなければ何も問われていないことになる。)……というのもその“*quid est*”が問われているものにとっては“がある(esse)”は前提条件(*praesuppositum*)だからである。というのも“がある”は“*propter quid*”にとって前提条件(*praesuppositum*)だからである。(23)

筆者が論じたいのはこの引用7. で現われた用語“前提条件(*praesuppositum*)”の学的知識の総体に於ける論理的位階である。さてトマスによって“前提条件”と呼ばれた“がある(esse)”と問い“*propter quid*”, “*quid est*”の間の關係はこれに先立つ箇所ですべての様に論じられている；

8. “*propter quid*”の問いがなされる時には、まず明らかかな何ものかがなければならぬと同時に未だ知られていない探求さる可き何ものかがなければならぬ。というのも分析論後書第二卷にアリストテレスが言う様に、問いには(1) *an est*, (2) *quid est*, (3) *quia est*, (4) *propter quid* の四つがある。さてこれらのうちの二つ、即ち“*quid est*”と“*propter quid*”は同書で証明された様に同じことになる。(24) そして“*quid est*”が“*an est*”にかかわる様に“*propter quid*”は

“quia est”にかかわっている。従って“propter quid”の問いが為される時、二つの事が明らかでなければならぬ。すなわち“propter quid”が“quid est”と同じであるということに従えば、“propter quid”が問われる時“an est”は明らかでなければならぬし、“propter quid”が“quia est”と異なる⁽²⁵⁾ということに従えば、“quia est”が明らかでなければならぬ。それ故アリストテレスは“propter quid”の問いがなされる時には、二つのこと、即ち“事実 (quia)”と“がある (esse)”は明らかでなければならぬ、と言うのである。かくて例えば、“何故に月は欠けるのか”と問う時には、“月が欠けるという事実”は明らかでなければならぬ。実際もしこれが明らかでなければ“何故に (propter quid)”と問うことは無駄 (frustra) だからである。同様な理由で“人間とは何か”と問う時、“人間がある”⁽²⁶⁾ことは明らかでなければならぬ。

さてこの引用部分で論理的観点から特に興味深いのは質問間の論理的序列関係を示す用語として“frustra”が用いられている点である。この語によって問いが問いとして成立する有意味性の基準が示されている、と見做される可きである。この点の本論稿中で最も本質的な点に触れるので少し立ち入って説明を試みると、“propter quid A est B?”の問いが問いとして有意味である可能性は“A est B”, 即ち“quia A est B?”に対する肯定的答を前提とし、同様に“quid est A?”の問いが問いとして有意味となる可能性は“A est”即ち“an A est?”に対する肯定的答の成立を前提とするが、問題はこの前提の仕方であり、この仕方の特徴付けとしてトマスが語“frustra”を用いている、という点である。即ち、もし“A est B”が偽であるならば“propter quid A est B?”と問うことは的外れであり無駄なのであり (frustra), 従って“A est B propter quod ϕ ”なる文は真でも偽でもありえないということになる。状況は“quid est A?”と“A est”に関しても同じである。こうした、問いに対する答の妥当な要求を可能ならしめる論理的根拠としての肯定文の論理的地位を示す為にトマスは“praesuppositum”なる用語を導入するのであり、この“praesuppositum”で示される質問間の論理的序列関係はかくして本質的に階層的なのである。この論理的序列関係の階層性が良く表現されている例として次の一文を挙げておく：

9. ...*antequam* sciatur de aliquo an sit, *non potest* sciri proprie de eo quid est. (27)

以上の諸引用から、次の形式的関係が四つの諸質問間に成立するのが解る：

$$\begin{array}{ccc}
 \text{S1. } \text{propter quid } A \text{ est } B? \longrightarrow \text{quia } A \text{ est } B? & & \\
 \uparrow & & \downarrow \\
 \text{quid est } A*? & & \text{an } \dot{A} \text{ est?}
 \end{array}$$

ここで筆者は論理文法的には一般名詞と個別名詞を区別せず同一の範疇に属するものとして扱う。従って上図での項“A”は個別名詞（例えば“hoc”）でもあり得るし、また一般名詞（例えば“homo”）でもあり得る。図に於いて“ $\alpha \rightarrow \beta$ ”は、文“ α ”の有意味性は文“ β ”の肯定的答によって得られる知識内容を前提する（*praesupponere*）ことを示す。また“ $\alpha \Rightarrow \beta$ ”は、文“ α ”は文“ β ”の形に変換可能であることを示す。さて S1. は D1. の変換過程を通じて、次の様に簡単化される。⁽²⁸⁾

$$\begin{array}{ccc}
 \text{S2. } \text{propter quid } A \text{ est } B? \longrightarrow \text{quia } A \text{ est } B? & & \\
 & & \downarrow \\
 & & \text{an } \dot{A} \text{ est?}
 \end{array}$$

さて、今ここで諸質問間に成立した関係を手がかりとしてそれら諸質問に対応する叙述文、存在文に成立する関係に直してみよう。次の様な翻訳を行う：

$$\text{Tr1. } \text{propter quid } A \text{ est } B? \Leftrightarrow A \text{ est } A \text{ propter quod } \phi.$$

$$\text{Tr2. } \text{quia } A \text{ est } B? \Leftrightarrow A \text{ est } B.$$

$$\text{Tr3. } \text{an } A \text{ est?} \Leftrightarrow A \text{ est.}$$

S2 で示された諸質問間の有意味性の前提関係はただちに次のような対応する言明間の有意味性の前提関係を生ぜしめる：

$$\begin{array}{ccc}
 \text{S3. } A \text{ est } B \text{ propter quod } \phi \longrightarrow A \text{ est } B & & \\
 & & \downarrow \\
 & & A \text{ est.}
 \end{array}$$

即ち：

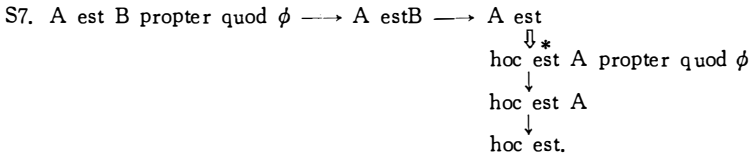
- 1) “A est B propter ϕ ” praesupponit “A est B”.
- 2) “A est B” praesupponit “A est”.
- 3) “A est B propter quod ϕ ” praesupponit “A est”.

これより次のテーゼを得る事になる：

Th1 原因文、叙述文は存在文を前提として持つ（*praesupponere*）。

ここで論理的に重大な問題が項“A”について発する。一般に項“A”は“homo”等の一般名詞であると考えられるが、実はそれでは充分ではなく、一応最終的な前提（*praesuppositum*）と思われる存在文“A est”も更に基本的な、最も基本的な

の、従って実存文の、論理的に基本的な性格が明らかとなるのである。さて上述及び引用 7. を論拠として我々は S3 に於ける “A est B propter quod ϕ ” から始まる前提関係の系列を更に下降することが可能である：



ここで S7. に於いて文 “ $\alpha \implies * \beta$ ” は文 “ α ” は知識探求的動機を通じて文 “ β ” に還元されることを意味するとする。さて S7 で特に注意を払われる可きことは、前提 (praesuppositum) 関係で最も下に来る、そしてそれより上の各言明で表現される知識を支えている言明 “hoc est” は名詞 “A” が適合し、かく呼ばれる所の何らかの個別者の実存を表現する言明であり、またそれ以上ではないことである。我々の知識の総体を最も下で支えるのは、“hoc est” という端的な個別者実存を表現する実存文なのであり、また言い換えれば個別者の実存を我々が知っている、ということなのである。かくて原因文、叙述文、本質文、存在文の諸言明は個別者実存を表現する “hoc est”，従って本質的に個別者実存の事実、にその有意味性の全根拠を委ねていることになる。実に知識の総体の根底にあってそれを支えているのは個別者実存の事実なのである。これより、従って最終的な次のテーゼを得る：

Th2. 原因文，叙述文，存在文の各言明は個別者実存を表現する実存文を前提する (praesupponere)。

末尾に今まで論じて来たことの現代の論理哲学との関係について簡単に触れておきたい。1959年にストローソン (Strawson, P. F.) はラッセルの記述理論を批判し、論理的前提 (logical presupposition) なる概念を導入した。⁽²⁹⁾ その内容を要約すれば；

文 “Fa” が真または偽となるのは項 “a” が存在者の名前である時、即ち “a is”⁽³⁰⁾ が真である時のみに限る、

ということであり、叙述文の有意味性を個別者に関する実存文の真性に委ねている。さてストローソンが設定するこの叙述文—実存文間の関係、即ち論理的前提 (logical presupposition) は上記の Th2. で述べられた諸文と実存文間に成立する

前提 (praesuppositum) 関係に対応するのは明らかである。現代の論理哲学を大きくにぎわしたこの概念が、既にトマスに於いて意識的に取りあげられていたという事実は彼の論理的緻細さを示す一つの証拠であり、論理学的に見て極めて興味深い一つの事実であることを指摘して論を閉じたい。

註

- (1) *APst.*, L. II, 1.
- (2) *In APst.*, L. II, lec. 1, 408.
- (3) *APst.*, L. II, 1, *In APst.*, L. II, lec. 1, 408.
- (4) *De Interpretatione*, 17a 1—3.
- (5) *In Perih.*, lec. VII, 83.
- (6) *In APst.*, L. II, lec. 1, 408.
- (7) *Word and Object*.
- (8) 量代記号と存在関与をめぐる諸問題については拙論
Ontological Burden of Grammatical Categories, Annals of the Japan Association for Philosophy of Science, Vol. 5, No.4, March 1979, pp. 185—285.
 で論じておいたので参照されたい。なおクワインのこの立場は例えば次の一節からも明らかであろう：Names are, in fact, altogether immaterial to ontological issue, for I have shown... that names can be converted to descriptions, and Russell has shown that descriptions can be eliminated. Whatever we say with the help of names can be said in a language which shuns the names altogether. (On What There Is, in *From a Logical Point of View*, p. 12)
- (9) 筆者はポーランドの論理学者レシニェフスキー (Leśniewski, S.) が構築した論理体系中、彼が *ontologia* と名付けたものを念頭に置いている。この体系の存在論的意義について筆者は註 (8) の拙論および *Formal Characters of Aristotelian Languages*, 『哲学』(三田哲学会編), 1979, 69集, 及び, “直視の形式化と論理的存在論”, 『哲学』(三田哲学会編), 1980, 71集で論じた。伝統的存在論を記述する論理言語体系としてのレシニェフスキー存在論の哲学的妥当性を、筆書はアリストテレスの下降主語系列の議論の論理的分析を通じて *Ontological Law of Contradiction and Its Logical Structure* (forthcoming in *The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, Vol.

6, 1981) で示した。尚更に詳しい中世哲学への適用の試みは *Medieval Logic and Metaphysics*, D. P. Henry, 1972, Hutchinson University Library, を参照されたい。

(10) *APst.*, L. II, 1.

(11) アリストテレス自身の主張は次の様である：しかし「或るものが他の或るものに」というようにははっきりと言い表わされていない問の場合には、最もしばしばその問いに求められているものそのものが見おとされがちである。たとえば、「人間は何であるか？」と問われるような場合【とかくこの問いによってなにが問い求められているのか不明である】、それはこの問いがあまりに単純に言い表わされていて、いまだこれらがこれである [...] というふうに区別されていないがためである。〔『形而上学』第七卷第十七章, 1041a32—b2, 出隆訳〕

(12) *aliquid unum.*

(13) 括弧内の補足は筆者。註解1663参照

(14) *In Meta.*, L. VII, lec. XVII, 1662.

...idest ista est causa dubitationis, quia in talibus simpliciter profertur aliquid unum, ut homo, et non proferuntur in quaestione illa quibus convenit esse hominem, sicut partes, vel etiam aliquod hominis suppositum.

(15) 論理的意味論, 即ち指示の理論。

(16) *In Meta.*, L. VII, lec. XVII, 1663.

(17) 引用 5.

(18) 例えば “homo”.

(19) *In Meta.*, L. VII, lec. XVII, 1663.

Et ideo quaestio quid est, potest transformari in quaestionem propter quid. Quaestio enim quid est, quaerit de quidditate propter quam id, de quo quid est quaeritur, praedicatur de quolibet suorum subiectorum, et convenit suis partibus. Propter hoc enim Socrates est homo, quia convenit ei illud, quod respondetur ad quaestionem quid est homo..... Idem ergo est quaerere quid est homo, et quaerere propter quid hoc, scilicet Socrates, est homo? ... Et ideo etiam hic dicit quod hoc facit dubitationem, quod in quaestione non additur hoc aut hoc.

またこの点については, *APst.*, L. II, 2 を参照。

(20) 文 “ α ”, “ β ” について “ $\alpha \equiv \beta$ ” は文 “ α ” と文 “ β ” は同義であると読むとする。

- (21) 引用1. 参照。
- (22) トマスは語 “hoc” を用いている。
- (23) *In Meta.*, L. VII, lec. XII, 1666.
- (24) 上述の D2. による本質の問いの原因の問いへの還元である。また *APst.*, L. II, 2 を参照。
- (25) トマスは “propter quid” と “quid est” の問いは構文的形態に於いて異る、と言うのである。彼は質問をその構文論的構造に従って分析論後書注解で二つに、即ち1)単純質問 (quaestio simplex) と2)複合質問 (quaestio composita) に分類している (*In APst.*, L. II, lec. 1, 409)。そして “propter quid” は複合質問であり (*op. cit.*, 410), “quid est” は単純質問である (*op. cit.*, 411)。この分類の基準は質問中に現われる(分詞をも含めた意味での)名詞の数であり、純粋に構文論的である。
- (26) *In Meta.*, L. VII, lec. XVII, 1651.
- (27) *In APst.*, L. I, lec. II, 17.
- (28) この際, “quid est A*?” の問いは D1. または D2. によって “propter quid hoc est A*?” に変換される。即ち, S1 での “propter quid A est B?” の項 “A” に “hoc” を取り, 項 “B” に “A*” を取ったことになる。
- (29) *On Referring, Mind*, 1959.
- (30) “a” は個別者指示の単称名辞である。